様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３３３０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４５２０

研究課題名（和文）大学生と高齢者が協同学修で開発する介護予防支援者養成教育プログラム

研究課題名（英文）Educational Training Program for Supporters of Care Prevention Developed by University Students and Elderly People via Cooperative Learning

研究代表者
木林　勉（kibayashi, tsutomu）

金城大学・医療健康学部・教授

研究者番号：３０５１２３９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：介護予防の有用性を探るため高齢者の活動力についてアンケート調査を実施し、171人の回答から、有償活動・家庭外無償活動が生活満足度や主観的健康感の向上に有意に寄与するという知見を得た。
活動力の高い高齢者18人と学生20人を対象に「介護予防支援活動～地域での役割～」をテーマにルーブリックを用いた研修会を実施した。研修の半構造化インタビューで抽出したキーワードを基に、活動力を活かした介護予防支援プログラムを立案し、地域で実践した。介入の結果、筋力、バランス、歩行速度などの身体機能に加え、運動の継続や他者への啓発活動など行動変容面が有意に改善した。活動力を活かした支援方法は介護予防の有用な手段である。

研究成果の概要（英文）：We conducted a questionnaire survey about an energy of the elderly in order to examine the utility of care prevention and obtained knowledege that paid-activities and voluntlyactivities outside home contributed significantly to improvement of a subjective sence of well-being and life satisfaction from 171 replies of the questionnaire.
We ran a workshop using rubric on the subject of “Support activities for care- prevention: the role in the community” aimed at 18 elderly people and 20 students who had a high enegy. Based on keywords extracted from a interview of the workshop, we drew up a support program for care prevention utilizing the energy and conducted it in the community. As a result, aspects of behavior modification such as a continuation of exercises and enlightenment activities to others in addition to physical functions as strengh, balance, walking speed were significantly improved. Thus, we consider the way of support using the energy is an useful tool for care prevention.

研究分野：教育

キーワード：教育プログラム　協同学修　介護予防　人的地域資源　アクティブラーニング

１．研究開始当初の背景

介護予防支援活動を中心的に進める役割を持つ理学・作業療法士を養成する大学において、介護予防支援活動の必要性や重要性を説くことができても、その具体的な過程や研修プログラムを学生に指導するまでには至っていない現状がある。学生は知識として理解していても、それを活用する具体的な方法を有していないのである。

一方で介護支援活動の中心となる地域では来るべき高齢社会に備え、自助や互助の必要性が高まっている。地域のボランティア団体等の中心的な役割は高齢者自身が担っているが、その活動は自らの経験のみに基づいているものが多い。介護予防推進活動の推進役を養成する報告はいくつかあるものの、効果的な研修プログラムの構成や具体的内容、成果に関する共通認識は得られていない。

２．研究の目的

本研究は、地域の介護予防支援活動を活性化させるというニーズと、その指導者を育成するという大学の教育的ニーズを結びつけることを目的としている。介護予防支援活動による地域活性化を目的に、高齢者の力（成熟した指導力、豊富な知識や経験・技術、特技、文化的存在感など）を活用し、理学・作業療法学科生（学生）がプログラムを企画・立案する。さらに地域での実践方法および活動計画の作成、達成度評価までを組み込み、その構成や内容を検証する。これらのプロセスで学生と高齢者が自分はどうなりたいか、生活している地域がどうなればよいかを考えることで、介護予防支援活動の一翼を担う人材を養成する。

研究として、地域の高齢者が持つ力を調査し、それを活用することで、介護予防支援活動を目的とした支援者養成教育プログラムを開発し、その構成と内容について検証する。また、学生と高齢者が協同で学修することで、相互の不足している分を補い、持っている部分を活かし合う関係性について、アクティブラーニングを用い教育効果について明らかにする。

３．研究の方法

４つの研究を段階的に進める。各研究について対象者と方法を示す。

(1)高齢者の活動力調査

先行研究や研究者がこれまで取り組んできた調査・研究成果を踏まえ、高齢者の持つ力が活かされている地域活動についてアンケート調査を実施した。対象は本学の介護予防事業「悠遊健康サークル」の修了者 200 人及び地元自治体の養成した介護予防リーダー100 人の計 300 人とした。

(2)基礎・実践研修の試行とその性能評価

アンケートから発掘された地域の人的資源である高齢者 18 人を選出し、学生 20 人と「介護予防支援活動～地域での役割～」をテーマに基礎研修、実践研修を実施した。基礎研修では介護予防を実践している事業者や教員が社会背景や高齢者の身体特性、疾患や障害など介護予防に必要な理念・知識を教授した。実践研修では、マナーやモラルの学修やコミュニケーション能力の向上をねらいとしたアクティブラーニング手法を用いて、通いの場の把握やそのあり方、社会参加、地域資源とネットワーク、外出・運動の継続・食生活の管理など行動変容への工夫などについて検討した。

地域の人的資源である高齢者と学生が協同で学修することで獲得すると考えられる不足している分を補い持っている部分を活かし合う相互の関係性や教育効果などについて達成度を図るルーブリック評価とアンケート調査を実施した。

(3)地域研修の試行とその性能評価

基礎研修、実践研修修了者である地域の人的資源である高齢者と学生が、アンケート結果やグループディスカッションの逐語から抽出されたキーワードと研修で身につけた知識・技術を元に、プログラムを立案した。それに沿って地域の公民館で試験実施することを地域研修と位置づけ、実際の場面で得られる課題への対応能力や働きかける力、課題発見力、情況把握力、計画力、柔軟性、プレゼンテーション力についてインタビューからテキストマイニングを実施し、出現の頻度・傾向を探った。

(4)地域研修プログラム参加者の介護予防評価

地域研修プログラム参加者である 16 人(男性 7 人、女性 9 人：平均年齢 70.9±4.4 歳)に対し、筋力（握力・足趾把持力）・バランス（重心動揺計・Functional Reach Test）・歩行及びパフォーマンステスト（５m 歩行速度・Timed Up and Go）など運動機能テストと 16 項目からなる行動変容を評価するアンケート調査を実施した。運動機能テスト、アンケート調査は地域研修開始前、研修終了後、研修終了１ヶ月後の３回測定した。

(5)プログラムの性能評価

高齢者と学生の協働学修からなる３段階の研修について半構成インタビューを実施しテキストマイニングにより形式知化を試みた。また、地域研修プログラム参加者の感想や意見を求め、運動機能テストや行動変容を図るアンケートと共にプログラムの効果を判定する方法の一助とした。

４．研究成果

研究毎に結果を示す。

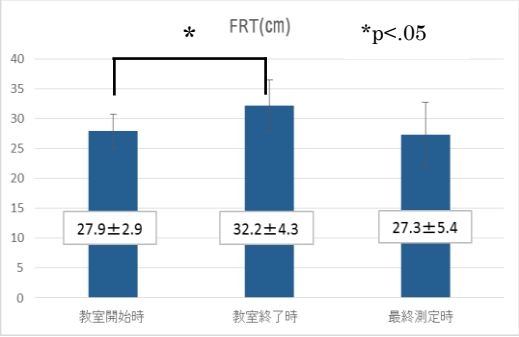
(1)171 人の回答（回収率 57.0%）から生活満足度と主観的健康感の向上には、有償活動・家庭外無償活動が有意に寄与するという知見が得られた。

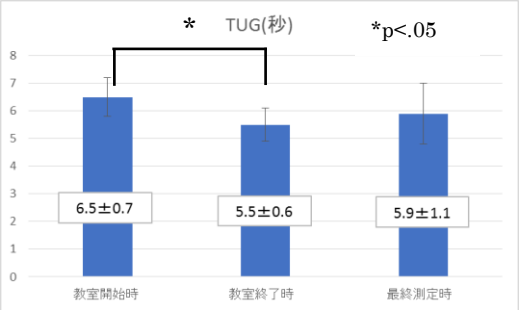
(2)教育効果の指標と用いるために到達達成度ルーブリック評価の信頼性と構成概念の妥当性を検証した。その結果、クロンバック

アルファ係数は 0.82 を示したことから信頼性は確認できた。因子分析は複数項目の因子負荷について偏りが見られ、カテゴリー化することで妥当性を検証した。基礎・実践研修の内容についてグループワークから吟味し、教育効果を測定する上で不可欠な 14 の能力が抽出できた。到達達成度ルーブリック評価では理解度の標準化が図られ、求められた基準まで達していた。プログラムの学修の性能を図るツールとして用いたアンケート調査では、概ね肯定的な意見が得られた。

(3)基礎研修、実践研修修了者は、地域研修で健康増進及び介護予防には運動や外出がよいことはよく理解されており、説くことはできるが、継続の困難さや外出の目的が見つからないなどといった課題への対応力が不十分であった。事業に参加している者に立脚した考え方やその生活背景の理解についての必要性が抽出された。動機になるものと定期的な刺激の強化の必要性が重要であり、介護予防プログラムへの反映方法が話し合われた。

(4)支持面の上で姿勢を保つバランス、立ち上がる・歩く、方向転換などの複合的な動作など転倒予防に関連するテストにおいてはプログラム実施前と比較して有意な改善がみられた。アンケート調査からは主観的健康感が有意に高くなった。また、行動変容には目標の有無が影響を及ぼすことが示唆された。１ヶ月後の運動機能テストは全て値が元に戻りつつあることから運動の継続が課題となった。





(5)プログラムの性能評価

プログラム立案者である高齢者と学生からは半構成インタビューから世代間のギャップ、社会へのつながり、継続力、働きかけ力、プレゼンテーション力が主なワードとしてあがってきた。

高齢者が介護予防事業へ参加するためには、対象者立脚型の大学生と高齢者の協同学修およびそれにより開発される介護予防支援者養成教育プログラムが重要となる。研究代表者が 2009 年から地元自治体と協定し、地域と連携した実践的な健康教育として「悠遊健康サークル」と称した事業を基盤として本研究を実施した。

成熟した指導力や豊富な知識経験・技術、特技、文化的存在感などを持つ高齢者の人的地域資源と、柔軟な発想力や行動力を持つ大学生が融合した環境を作り、主体的な企画能力を高め、自由な発想と双方の活発な討論の中で、効果的な介護予防支援活動の実現に向けたプログラムの立案は効果的に地域に働きかけた。地域の人的資源として高齢者の持つ力は有償活動・家庭外無償活動で捉えることができ、それは生活満足度と主観的健康感の向上に有意に寄与するという知見が得られた。また、学生の視点からは「介護予防支援活動～地域での役割～」でのグループワークで社会参加、地域資源とネットワーク、行動変容への工夫など多くの学びを得ることができた。介護予防プログラム立案の成功には、教育効果を測定する 14 の能力と主体的な企画能力、柔軟な発想、異世代間の活発な討論が重要である。介護予防は高齢者だけの問題としてとらえるのではなく、地域全体のヘルスプロモーション意識として取り組まなければならない。より俯瞰した視点として幼児期から高年期までの様々なライフステージのエンパワーメントを高め、実践をベースとした健康増進が基本となる。

本研究は学術大会、研修会および学会誌等での研究成果発表は終了し、研究代表者所属機関の「教育研究推進センター」の年報へ掲載した。

まとめ

成熟した指導力や豊富な知識経験・技術、特技、文化的存在感などを持つ高齢者の人的地域資源と、柔軟な発想力や行動力を持つ大学生が融合した環境を作り、主体的な企画能力を高め、自由な発想と双方の活発な討論の中で、効果的な介護予防支援活動の実現に向けたプログラムを作成した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 木林 勉、越納 美和、性差からみた高齢期の生産的活動と生活満足度との関連、日本「性とこころ」関連問題学会誌、査読有、9 巻、2018、271-279

② 越納 美和、木林 勉、性差から見た医療職を目指す学生の身体障がい者に対する態度(ATDP)の肯定化教育の可能性、日本「性とこころ」関連問題学会誌、査読有、9

巻、2018、266-270

③ 越納 美和、木林 勉、観光資源活用型健康増進プログラム（陶芸編）が小学生に及ぼす効果、社会福祉サイエンス、査読有、4巻、2017、85-89

④ 木林 勉、越納 美和、高齢期の生産的活動と生活満足度・主観的健康感の向上との関連、地域福祉サイエンス、査読有、4巻、2017、91-95

⑤ 越納 美和、木林 勉、地域高齢者における健康教育によるヘルスプロモーションと主観的健康感との関連、日本ヘルスプロモーション学会誌、査読有、9巻、2017、22-27

〔学会発表〕（計 12 件）

① 木林 勉、越納 美和、性差からみた高齢期の生産的活動と生活満足度との関連、日本「性とこころ」関連問題学会 第9回学術研究大会、2017

② 木林 勉、越納 美和、多世代協同健康増進プログラムによる在宅高齢者の運動継続効果の検討、日本ウェルネス学会第14回大会、2017

③ 木林 勉、越納 美和、大学生との関わりが在宅高齢者の 主観的健康感と生活満足度に与える影響、日本世代間交流学会第8回全国大会、2017

④ 木林 勉、越納 美和、在宅で暮らす高齢者と脳卒中片麻痺者の歩行速度から見た評価－専門職の歩行支援方法の検討－、第44回日本脳神経看護研究学会、2017

⑤ 木林 勉、越納 美和、在宅高齢者との関わりが大学生の人間関係構築能力に及ぼす影響 －異世代協働健康増進プログラムの開発－、第25回日本人間関係学会、2017

〔図書〕（計 5 件）

① 木林　勉　他、医歯薬出版株式会社、解剖学、生理学、運動学に基づく動作分析、2018

② 木林　勉　他、南江堂、高齢者理学療法テキスト、2017

③ 木林　勉　他、文光堂、実学としてのリハビリテーション概観、2017

④ 木林　勉　他、文光堂、実学としての理学療法概観、2017

⑤ 木林 勉　他、文光堂、図解運動療法ガイド、2017

６．研究組織

(1)研究代表者
木林　勉（KIBAYASHI,tsutomu）
金城大学・医療健康学部・教授
研究者番号：30512397

(2)研究分担者
越納　美和（KOSHINOU,miwa）
金城大学・看護学部・助教
研究者番号：80512483

(3)研究協力者
奈良　勲(NARA,isao)